

あとがき

大正大学副学長 人間環境学科教授
木元 修一

石牟礼道子が亡くなった。「苦海浄土—わが水俣病」が出てから約半世紀。不知火海の美しい自然、豊かな水産物、漁師たちの海と共にあった生活、それらがメチル水銀化合物によって破壊されていく。水俣病の悲劇と向き合い、患者の万感の思いを汲み取って文章化した。

なんか身体がおかしい。感覚が狂っている。力が入らず話しにくい。栄養をつけなくてはと魚をたくさん食べ、さらに病状が悪化していく。1人が発症すれば家族の生活の歯車が狂っていく。なんでこんな目にあわなければならないのか。

「海の上はよかった。ほんに海の上はよかった。うちゃ、どうしてもこうしても、もういっぺん元の体にかえしてもろて、自分で舟漕いで働こうごだる。いまは、うちゃほんに情けなか。」「うちは前は達者かった。手も足もぎんぎんしとった。働き者じゃちゅうてほめられものでした。うちは寝とつても仕事のことばかり考ゆるばい。」「うちが働かんば家内が立たんとじゃもね。」

「人並みの子に生まれてくれいちゅうてかあちゃんも、ねごうたよ。赤子のときは当たりまえの子に生まれたがねえ。何でこういう姿になったかねえ。手の指も足の指もいっぽんも欠けることなしに生まれたものを、なして、この手がだんだん干こけて、曲がるかねえ。悪かことしたもんのように、曲がるかねえ。」「ガッコにも上がらんうちに、おっとろしか病気にとかまってしもうた。」

この作品は単なる聞き書きによるルポルタージュではない。まして闘争記録などではない。著者のすぐれた共感能力がとらえた民衆の心の叫びである。講談社文庫の解説—石牟礼道子の世界で渡辺京二氏は著者の次の言葉を引用している。

「だって、あの人が心の中で言ってることを文字にすると、ああなるんだもの」

石牟礼道子とはどんな人か。天草に生まれ3歳のときに水俣に移る。小さい頃から優秀で神童と言われ、成績は今で言うオール5。周りからは教師になれと言われたが「嫌だ小説家になる」と言い張ったらしい。いつも大きい声で本を読む文学少女だった。13歳で短歌を作るようになる。また歌が上手で代用教員時代も教室でしょっちゅう歌っていたとのこと。彼女の美声は有名である。

「この秋にいよいよ死ぬべしと思うとき十九の命いとしくてならぬ」

3回自殺未遂をしている。孤独感、虚無感は終生付きまとった。（「評伝 石牟礼道子—渚に立つひと」米本浩二著 新潮社による）

困っている人、苦境にある人を見過ごせない。弱者に寄り添うという基本的姿勢は若年の頃からのものである。汽車の中で出会った戦災孤児タデ子を自宅に引き取り40日も面倒を見ている。しかもずーと見れなかったことを悔いている。「タデ子も人、私も人、だのに何故、タデ子は放り出されねばならないのか。それでいいのでございましょうか。私はお金が、モノが沢山たくさん欲しいと思いました。そして私自身のもっともっと強い強い力が欲しいと思いました。（タデ子の記）この作品は涙なしには読めない。

「椿の海の記」は水銀で破壊される以前の、季節感溢れる水俣の人々の生活を描いて秀逸。「苦海浄土」と合わせて読むと破壊のすさまじさがよく分かる。

世界はグローバル化という均質化が進み、またA I の時代といわれバーチャル化が進む。だから人と自然と生活を魂の底から描いた石牟礼文学がもっと読まれていいと思う。近代文明以前の人間の営みが息づいているから。